

令和5年度
興南高等学校
入学試験問題

前期

国語

令和5年1月14日（土）実施 50分／100点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。
解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は50分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書^{かいしよ}で丁寧^{ていねい}に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、中学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。

【一】 次の【本文】と続く【資料】を読み、後の各問いに答えよ。答えは楷書で丁寧に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合採点されないため注意せよ。

【本文】

① スマホへの漠とした不安の正体は何なのか。この問いについて考える前に、まず皆さんに質問をしたいと思います。

② 日常的におしゃべりする友だちは何人くらいいますか？

③ 年賀状やSNS、メールで年始の挨拶を発信しようと思うとき、リストに頼らず、頭に浮かぶ人は何人くらいいますか？

いかがでしょう。ぼくが今まで学生などに聞いた限り、①は10人くらい、②は100人くらいまで、③は100人くらいまで、というのが標準的な答えです。これは、おそろく全国どこでも同じだと思います。

④ ぼくが、なぜこのような質問をしたかというところ、今、「自分がつながっていると思う人」の数と、「実際に信頼をもつてつながることができる人」の数の間にギャップが生まれているのではないかと、そして、このギャップの大きさが、現代に生きる人たち、特に生まれたときからデジタルに囲まれた世界に生きる若者たちの不安につながっているのではないかと、そう思うからです。

⑤ 人間は、進化の歴史を通じ、一貫して付き合う仲間の数を増やしてきました。これは、人間のソセンが熱帯雨林からサバンナという危険な場所に進出したことが関係しています。長い歴史のある時点において、おそらくは地球規模の寒冷・乾燥化が起こり、それによって熱帯雨林が分断され、そこで暮らしていた動物たちはサバンナへ出て行くか、森が残る山に登るか、低地に散在する熱帯雨林に残るかを選択を迫られたのでしょうか。結果的に人間は熱帯雨林をでました。

⑥ そこで、いくつかの特徴を発達させたのです。その一つが集団の大きさです。危険な場所では、集団の規模は大きいほうが有利です。数が多ければ、一人が狙われるカクリツは低くなるし、防衛力も増します。危険を察知する目がたくさんあれば、敵の発見効率

も高まります。実際、森林ゾウとサバンナゾウでは、サバンナゾウのほうが、身体も大きく、集団規模も大きい。人間も、危機から自分の命、そして仲間の命を守るために、集団の規模を大きくしなければなりませんでした。

[5]ただし、集団を大きくすると、食物や安全な休息場所をめぐってトラブルが増えます。仲間の性質や、自分との関係をきちんと頭に入れておかないとうまく対処できなくなります。そのためには脳を大きくする必要があります。皆さんの中には、人間の脳は言葉を使い始めたことで大きくなったと思っている人がいるかもしれませんが、人間が言葉を話し始めたのは7万年ほど前にすぎません。一方で、脳が大きくなり始めたのは、それよりずっと以前の約200万年前に遡さかのぼります。

[6]人間の脳の大きさには、実は集団規模が関係しています。チンパンジーとの共通ソセンから分かれた約700万年前から長らくの間、人間の脳は小さいままでした。この頃の集団サイズは10〜20人くらいと推定されています。これは、ゴリラの平均的な集団サイズと同じ。言葉ではなく、身体と同調だけで、まるで一つの生き物のように動ける集団の大きさといえます。サッカーが11人、ラグビーが15人など、スポーツのチームを考えるとわかりやすいでしょう。これは、皆さんが互いに信頼し合っておしゃべりをする友だちの数①に当たります。200万年前、脳が大きくなり始めた頃の集団サイズの推定値は30〜50人程度。ちょうど先生一人でまとめられる一クラスの人数ですね。日常的に顔を合わせて暮らす仲間の数、誰かが何かをティーンしたら分裂せずにとまっただける集団の数です。

[7]その後、人間の脳は、ゴリラの3倍程度の1400ccに達し、現代人の脳の大きさになりました。そして、この大きさの脳に見合った集団のサイズが、100〜150人。これが②に当たる数です。

[8]これは、ロビン・ダンバーというイギリスの人類学者が、人間以外の霊長類の脳の大きさと、その種の平均的な集団サイズの相関関係から導きだした仮説に基づく数字です。ダンバーは、平均的な集団サイズが大きければ大きいほど、脳に占める大脳新皮質、つ

まり知覚、思考、記憶をつかさどる部分の割合が大きいくことを明らかにしました。そして、現代人の脳の大きさに見合った集団の人数を示す、この「150」という数字は、実におもしろい数字であることがわかりました、文化人類学者の間で「マジックナンバー」と言われているのはそのためです。

9 食糧生産、つまり農耕ボクチク^dを始める前まで、人間は、この150人くらいの規模の集団で狩猟採集生活を送っていました。天の恵みである自然の食物を探しながら移動生活をする人々には、土地に執着したり、多くの物を個人で所有したりといったことがありません。限られた食糧をみんなで分け合い、平等な関係を保って協力し合いながら移動生活を送るためには、150人が限度なのでしょう。そして、現代でも、このような食糧生産をしない狩猟採集民の暮らしをしている村の平均サイズが実に150人程度なのです。

10 言い換えれば、150人というのは、昔も今も、人間が安定的な関係を保てる人数の上限だということです。皆さんの生活でいえば、一緒に何かを経験し、キド^e哀楽を共にした記憶でつながっている人ということになるでしょうか。ぼくにとっては、年賀状を出そうと思ったとき、リストを見ずに思いつく人の数がちょうどこのくらいです。互いに顔がわかって、自分がトラブルを抱えたときに、疑いもなく力になってくれると自分が思っている人の数ともいえます。

11 今、ぼくたちを取り巻く環境はものすごいスピードで変化しています。人類はこれまで、農耕ボクチクを始めた約1万2000年前の農業革命、18世紀の産業革命、そして現代の情報革命と、大きな文明の転換点を経験してきました。そして、その間隔はどんどん短くなっています。農業革命から産業革命までは1万年以上の年月があったのに、次の情報革命まではわずか数百年。この四半世紀の変化の激しさを考えれば、次の革命まではほんの数十年かもしれないかもしれません。その中心にあるのがICT (Information and communication Technology = 情報通信技術) です。インターネットでつながるようになった人間の数は、狩猟採集民だった時代から

は想像もできないくらい膨大になりました。

12 一方で、人間の脳は大きくなっていません。つまり、インターネットを通じてつながれる人数は劇的に増えたのに、人間が安定的な信頼関係を保てる集団のサイズ、信頼できる仲間の数は150人規模のままだということです。テクノロジーが発達して、見知らぬ大勢の人たちとつながれるようになった人間は、そのことに気づかず、AIを駆使すればどんどん集団規模は拡大できるという幻想に取り憑かれています。こうした誤解や幻想が、意識のギャップや不正を生んでいるのではないか。ぼくはそう考えています。そして、子どもたちの漠とした不安も、このギャップからきているのではないのでしょうか。

【 山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』ポプラ新書 ※問題作成の都合上一部改変 】

【資料】

ツイッターやインスタグラムの大きな特徴のひとつは、それほど難しいスキルを使わなくても「加工」ができることである。内面的にも外見的にも自分の嫌な部分を隠すことが比較的簡単にできる。徹底的に良いところだけを見せ続けることが可能であるし、あくまで横断的*せつなで利他的な自己開示であるために、実際の人間関係では難しいような自己コントロールもある程度可能なのである。このこともSNSで自分の評価を維持しやすい要因のひとつであろう。SNSでは一般的に自分の意に沿わない相手を「ブロック」することができる。双方向的なコミュニケーションツールでありながら、自分からのメッセージも他人からのメッセージも比較的にコントロールしやすい。このようにそもそもSNSは拒否回避的なツールであり、拒否的・否定的な反応を確認しづらくなっている。賞賛されやすく、拒否されにくい、これをうまく利用することができれば、「無条件の承認」を得ているかのような幻想を持つことも可能なのかもしれない。(中略)

現代に生きるわれわれにとって、SNSでの「承認」とリアルな社会での「承認」との落差は大きい。実際の人間関係においては、他人に褒められたい気持ちがあっても、ありのままに自分を表現することで浮いてしまうのではないか、拒否されてしまうのではないかと心配したり、本当の自分を見せることで相手を失望させるのではないか、そんなことをして恥をかいってしまうのではないかという思いから逃れることはできない。何かしらの基準がなければ他人から承認されている実感を持ちにくいのだ。それに比べて、SNSではそれが確認しやすいえに、無限に承認を受けることができるのではないかという期待を持たせてくれる。

これはひとを成長させる動機にもなるが、反面常に誰かに設定された承認の条件に向かって動き続けなければならぬという意味でもある。しかし承認の根拠があいまいなまま「ありのまま」を受け入れてもらうよりも、与えられた明確な条件のもと、それを追いかけていけばよいという安心感の方を今のひととは選んだのではないか。見方を変えれば、ひとから認められる存在になりたえということより、ひとから認め続けてもらえる存在になることを求めているようにも見える。

【正木大貴 「承認欲求についての心理学的考察」京都女子大学大学院現代社会研究科紀要 ※問題作成の都合上一部改変】
【語注】利那……ほんのわずかな時間のこと。

問一 二重傍線部 a～e のカタカナを漢字に直して答えよ。

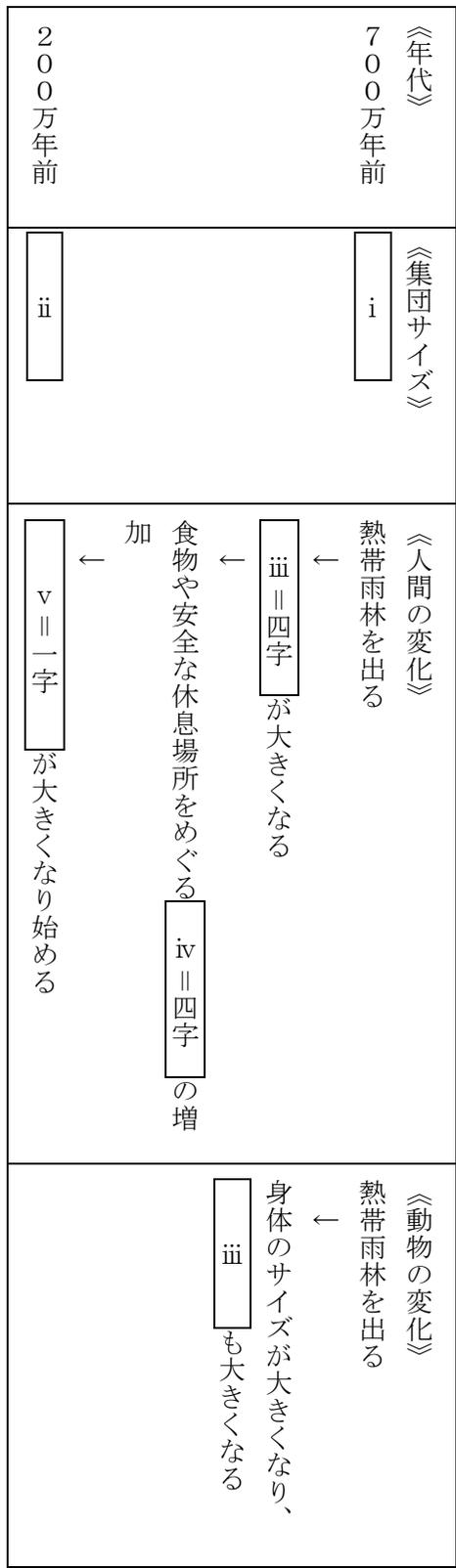
- a 人間のソセン b カクリツは低くなる c 何かをティアンしたら d 農耕ボクチク e キド哀楽

問二 傍線部①「②は100人くらいまで」とあるが、筆者はこれをどのような数だととらえているか。それがわかる箇所を本文中から十五字で特定し、そのまま抜き出して答えよ。

問三 傍線部②「これは全国どこでも同じだと思います」と筆者が述べるのはなぜか。その理由を説明したのものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 人間がつながることができる規模は、生活様式によって違いが出るが、日本国内においては大差はないから。
 イ 人間がつながることができる規模は、人間の脳の容量によるものであり、地域や環境によるものでないから。
 ウ 人間がつながることができる規模は、狩猟から農耕生活への移行により拡大したが、最近の変化ではないから。
 エ 人間がつながることができる規模は、産業革命以降に急速に大きくなったもので、現代はまさに変化中だから。

問四 【本文】の4と6について、その内容を次の図表のようにまとめた。以下の各問いに答えよ。



1 空欄 i、ii に入るものとして最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア 10～20人 イ 20～30人 ウ 30～50人 エ 50～70人 オ 100～150人

2 空欄 iii～v に入る語句を本文中よりそれぞれ指定字数に注意して特定し、そのまま抜き出して答えよ。

問五 次の一文は、【本文】中の段落①～⑫のいずれかの末尾に入る。最も適当な段落を①～⑫の算用数字のみで答えよ。
言葉を使ったから脳が大きくなったのではないのです。

問六 【本文】の表現上の特徴を説明したものとして適当なものを、次のア～オから二つを選び、それぞれ記号で答えよ。(順不同)
ア ①で「まず皆さんに質問をしたいと思います」とあるように、読者に対し問いかけることで、読者が主体的に読み、共に考えるようにすることで論旨の理解を深めている。

イ ③～⑤で集団規模が拡大していった歴史的経緯を明らかにし、⑥・⑦段落ではそれに伴う人間の脳の容量の増加を、ゴリラの集団サイズの変遷から明らかにしている。

ウ ⑥でサッカーやラグビーなど、学生たちに身近な具体例を挙げて論旨の説明を進めていることから、学生だけを読者(聞き手)と想定したうえで理解を促している。

エ ⑧で筆者は「ロビン・ダンバーというイギリスの人類学者」の説を引用し、いくつかの研究結果に共通する「150」という数字がもつ興味深い意味を強調している。

オ ⑪で「人類はこれまで」という記述以降において、人間を取り巻く環境変化がめまぐるしいスピードで起きていることを、多数の比喩や具体例を用いて紹介している。

問七 次の会話は、【本文】と【資料】を読んだ先生及び生徒A～Eが意見を述べ合ったものである。生徒A～Eの発言のうち、本文や資料の内容に明らかに即していないものを選び、答えはA～Eの記号のみで記入すること。

先生 …【本文】では、人間が安定的な信頼関係を築ける人数は150人なのに、現代人がインターネットでそれ以上の関係を築こ

うとしていることを述べているね。そこで生じる問題について、【本文】及び【資料】をもとに考えてみよう。

生徒A…【資料】では、気軽に相手をブロックできることを指摘しているよ。他人から否定されることは怖いから、そうした否定的な反応を避けてしまおうだね。気楽につながりを断って、自分に都合の良い人とだけ繋がれるという不安定な関係が、SNSの特徴だね。

生徒B…Aさんが言った不安定な関係について、【資料】の筆者は自己の「加工」にも言及しているね。断片的に、自分の良いところだけを見せれば、「無限に承認を得る」こともできそうな気がしてしまうね。でも、本当の自分を見せていないから、結局うわべだけのつながりだね。

生徒C…確かに、現代人は、一方的に「承認」を得ようとしているんだね。さらに【資料】では、SNSを使用する人は「無条件の承認」を得ることを期待しているのに、実際には「誰かに設定された承認の条件に向かって動き続ける」という真逆の状況になっていることが示されるよ。

生徒D…Cさんの意見は鋭いね。本当は、一緒に色々な体験をするという双方向的なつながりが「信頼」を築くはずだよ。これはSNSでの他人とのつながりとは全く違うね。現代人はその違いは明確に把握しながら、現実での人間関係のわかりにくさを嫌って、関係の構築を拒否しているね。

生徒E…インターネットで多くの人と信頼関係を保てるというのは、幻想だね。SNSを用いても、「自分がつながっていると思っている人」の数は無限に増え続けているのに、実は安定的な信頼関係を全く築けない。【本文】**12**で筆者がいう「意識のギャップ」の一例と言えるよ。

【二】 次の【本文】は、森絵都もりえとの小説『架空の球を追う』の全文である。【資料】は、森絵都が、高校生の悩みに答えるというテーマで書いたエッセイである。さらに、そのエッセイを読んで、その内容をまとめたのが【ノート】である。これらを読んで、後の問いに答えよ。答えは楷書で丁寧に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合採点されないため注意せよ。

【本文】

天から注ぐ西日がグラウンド一面にホースで撒まいたような橙だいだいを広げている。無数の小さな靴底まがその橙を蹴散らし、光が拡散する。光の粒子とも砂ともつかないざらざらが立ちのぼり、うごめく人影を不透明な膜で覆う。

白球が、その膜を切り裂くように貫いていった。

「もう一本」

「それ行け」

「よく見ろ」

矢継ぎ早のがなり声に煽あおられ駆けまわる少年たちは皆、空色の生地あはの紺のラインを刻んだユニホームに身を包んでいる。頭には野球帽、左手にはグローブ。観ているほうまでむずむずするような初々しさは共通だが、その年齢にはばらつきがあるのか、一列に並んでノックを待つ頭の高さは見事な凹凸おうとつを描いている。とりわけ小さな何人かの肩はグローブの重みで垂れさがり、今にも地面に落ちそうだ。

グラウンドの隅ではやや年長の四人組がサッカーボールを転がしていて、なかなか達人なパスさばきにもかかわらず、ベンチで憩う人々の視線は足下もおぼつかない少年野球団に集中している。

「もっとボールを見る」

「もっと走れ」

「もっと声を出せ」

「もっとだ、もっと」

こと子供の競技に関しては、^②そのないフラインプレイよりも危なっかしい程度のほうが観ている味わい深いようだ。コーチとおぼしき堅太りの男が徐々に^③激していく様子にも独特の風情がある。軽めのゴロでさえまだ荷が重たげな少年たちに、彼は先程からフライの練習を課している。

かきん。とぼけた音を立ててコーチがフライを打ちあげ、少年の一人がそれを追う。そして、落とす。ボールは頭上に掲げたグロブの遥か先に、あるいはまったく見当違いの方向にしらじらと着地する。

「なにやっつてんだ」

コーチが i を響かせ、再びフライを打ちあげる。次の子が追いかけ、また落とす。次の子も。ボールは頑として誰のグロブにも収まろうとしない。

「一人くらいは捕らんか」

コーチの声が悲壮感を帯びてくる。少年たちは体をくねらせてにやつき、まるで反省の色がない。おい、全力でやれ。見かねたギヤラリーから叱咤^{*いしった}の声が飛ぶと、弾かれたように少年の一人が全力で駆けだした——自分の番でもないのに。そのまま彼はどこへ行ったのか二度と戻ってこない。

「今はあんなんでもさあ」

となり合わせたベンチから気の抜けた女性の声がした。

「将来は、わかんないよね。イチローだってガキの頃はあんなだったかもしれないし」

「だよ。まだまだどこで一発逆転があるかわかんないよね」

「ドラフト一位でがっぼり契約金もらってCMに出て、豪邸建ててくれないかな」

「嫁はモデルか女子アナか」

リアリティのない会話に興ずる母親たちの眼前で、少年たちの練習はますますもって ii を極めていく。集中力を欠いてきた彼らは地面の砂をスパイクで削ったり、獣のように吠えたり歌をうたったりと片時もじっとしていない。

「ダメだ。こんなんじや話にならん」

ついにコーチがバットを投げだした。

「いいか、もつと集中しろ。難しいことは言わん、できることから始めよう。もうボールは捕れなくてもかまわんから、まずは走り方だ。今みたいにおっちらおっちら空を見上げてうしろ歩きをしてたんじや、一生、ボールに追いつけんぞ。フライを追うときにはいったん体の向きを変えてしつかり走るんだ。ただし、ボールからは絶対に目を離すな」

こうだ、と自らその模範的走り方を演じてみせる。

「よしほらフライが飛んできたぞ」

^{*2} しゃかりきに架空の球を追う彼の額は汗で濡れ、早くも息があがっている。フライを追う。日頃は視界を素通りしがちなプレイの難儀さ、水面下の奮闘がひしひしと伝わってくる。ひよつとするとそれにはホームランを追う以上に研ぎ澄まされた技巧を要するのではないかとさえ思えてくる。しかし、^④ そんな錯覚 ^{*3} を本気で受け入れるにはいかんせん何かが欠けていた。

ボールだ。

架空の球が飛んでいる、という前提を差し引いて眺めると、残念ながらグラウンドの彼はただ必死で横走りをしているにすぎない。

^{*4}「欽ちゃん走りみたい」

横のベンチで母親の一人がつぶやくのを聞いたとき、さつきから胸にもやつきながらも形にならずにいたものが一瞬で明確な像を結び、私は危うく膝を叩きそうになった。

「おまえらも一人ずつやってみる。よしほらフライが飛んできたぞ」

自分が欽ちゃんに似ているなどは露も知らない^{*5}コーチは額の汗を拭いながら少年たちに向きなおし、空中にあるべき架空の球を示す。

「追え」

列の先頭にいた少年たちはとまどい、周囲の顔色をきよろきよろとうかがって、ようやく観念したように走りだす。コーチを真似^{まね}ようとする彼の中で、その目的はすでに「架空の球を追う」から「すつとこどっこいな横走り」にすりかわっている。欽ちゃんを知らない世代とは思えない見事な模倣^{もほう}ぶりだ。順番を待つ少年たちからどつと笑いが立ちのぼる。さつきから笑いたくて仕方がなかったのだろう。その反応に気をよくした少年はさらなるウケを狙い、横走りの足をがに股にしてみせる。故意につんのめっておつとつと、などとおどけてみせたりもする。

「ばかもの。練習をなめるんじゃない」

少年を叱るコーチの声は、しかしどこか不安げで覇気がない。^⑤ 自分がありえないミスを犯したことに気づきかけている。

「どんな練習も試合の本番と同じ姿勢で臨め。どんな一球もおろそかにするな。二死満塁の緊張感で食らいついていくんだ。いいな。次、よしほらフライが飛んできたぞ」

何を言っても遅きに失した。次の子も、そのまた次の子も、架空も球に挑むどの少年の頭も、もはやいかに道化的*6にふるまってみせるかでいっぱいになっている。忍者さながらの足さばきでグラウンドを突っ切っていく子。架空の球めがけてジャンプをくりかえし、仕上げに尻餅しりもちをついてみせる子。横走りかたむねと蟹歩きかにあそびを明らかに混同し、両手でハサミかたじまで象かたじっている子。そのたびにコーチは吠え、少年たちは爆笑し、ギャラリーからはため息がもれる。

「結局さ、さんざんユニホームだのグローブだのつてお金をかけたあげくに、高校生くらいになったらお母さん、僕はお笑い芸人になりたいんだとか、突拍子もないこと言いだしたりするんだらうね」

となり合わせた母親たちの会話がにわかにリアリティを帯びてきた。

「だよね。親の気も知らないで、俺は巨人*7よりも吉本*8の星になりたいんだ、とかさ」

「ボールよりも夢を追いかけたい、なんてね。マジ許せない」

「勘当もんだよ、勘当」

母親の一人が乾いた笑い声をたてながら「でも」と言い添える。

「でも、許しちゃうんだらうな」

「うん。許しちゃうんだらうね」

そうだ許しちゃうんだらうこの人たちは、と突然、影と影とが重なりあうように、彼女たちの心と私の心のそれとが同化した。今のこの一瞬——夕映えになまめくグラウンドで、調子に乗って iii を外して動物みたいにじゃれあって、生まれたてみたいなく

しゃくしゃの笑顔を風にさらしている、このたった一瞬を思いだしただけでも、この母たちはきつと数年後の彼らをいとも簡単に許してしまうのだろう、と。黄昏れゆく空に刃向かうようにグラウンドを駆けまわる、砂煙の向こうの少年たちがにわかには輝きを増して、なぜだかひどく貴重で得難い光景を前にしている思いがして、うるわしいのに切なくもあって、私はシャッターのようにまぶたをゆっくりと降ろしては、また開く。

【森絵都「架空の球を追う」文芸春秋 ※問題作成の都合上一部改変】

【語注】 * 1 叱咤……大声で叱って励ますこと。

* 2 しゃかりき……一生懸命。

* 3 いかんせん……残念ながら。

* 4 欽ちゃん走り……コメディアンの萩本欽一はぎもとけんいちが生み出した走り方。腕を左右に振りながら、横向きに走る。

* 5 露も知らない……少しも知らない。 * 6 道化……人を笑わせるようなこっけいな身ぶり。

* 7 巨人……プロ野球チームの一つ。 * 8 吉本……吉本興業。芸能プロダクションの一つ。

【資料】

(生徒の質問)

ぼくは誰ともつなげれない？

人と話をしているときに「壁」のようなものを感じます。本当の気持ちを伝えるのが怖いし、そもそも誰もぼくの話になんか興味を持っていないと思う。みんながぼくを避けている気がするし、実際、話していてもつまらなそうです。一生このまま、誰ともつなげれないのでしょうか。(男性)

(森絵都さんの回答)

あなたが誰かとながるために、本当の気持ちを打ちあげたり、面白い話をして興味を引いたりする必要はありません。

そんなに大変なことをしなくても、人とつながれる方法があります。「面白い話をする」のではなく、「相手の話を面白そうに聞く」のです。

あなたはきっと自分のトークに自信がないでしょう。でも、あなただけじゃありません。おしやべりが得意な人などほんの一部で、多くの人は自分の話に自信がないのです。だからこそ、誰かが自分の話を面白そうに聞いてくれると、うれしくなって、その誰かを大事にしようと思います。

そして、人の話を聞きつづけることで、あなたは気がつくことでしょう。「自分以外のみんなもそれほど大した話はしていない」と。

くりかえしますが、クラスの人気者のようなごく一部の人をのぞけば、誰もそれほど話上手じゃないのです。起承転結がなかったり、オチがなかったり、徹底的にくだらなかつたり、日常の会話とは大抵そんなのばかりです。

一方で、そのどうでもいいようなつまらない話の中に、それを語る「その人」にしかない個性や持ち味がひそんでいることにも、あなたは次第に気づいていくことでしよう。ちよつとした言いまわしとか、口癖だとか、独特の発想だとか。そこに面白味を見出せるようになったら、それだけ相手との壁が薄まったということですよ。

【日本ペンクラブ編「泣いたあとは、新しい靴をはこう。」ポプラ社 ※問題作成の都合上一部改変】

問一 傍線部①「無数の小さな靴底」にみられる表現技法を何というか。最も適切なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 倒置法 イ 体言止め ウ 隠喩 エ 擬人法 オ 直喩

問二 【本文】の空欄 i 〓 iii に入る語句として最も適当なものを次のア～カからそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア 悲壮 イ 道化 ウ 怒号 エ 羽目 オ 模範 カ 混乱

問三 傍線部②「そつのない」、③「激していく」の意味として最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

② そつのない ア むだがない イ 雑である ウ 技巧にすぐれた エ 単純な

③ 激していく ア 集中していく イ 悲しみを覚える ウ 興奮していく エ 当惑を深める

問四 傍線部④「そんな錯覚」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア ホームランを追うという絶対に捕れない故に成功するはずもないことよりも、架空のフライを追うほうが難しい技術を要するように思えること。

イ ホームランを追うというそもそも捕れないために簡単に諦められるはずのことよりも、架空のフライを追うことのほうが難しく思えてきたこと。

ウ ホームランを追うというそれ自体は難しくはないはずのことが、フライの捕球ができていないために、より難しいことのように思えること。

エ フライの捕球があまりに下手なために、ホームランを追うというこの場では場違いな発想をしてしまうような感覚に襲われていること。

オ フライの捕球があまりに下手なために、ホームランの捕球という不可能なことでも、プロ選手同様に簡単にやり遂げようという感覚になること。

問五 傍線部⑤「自分がありえないミスを犯したことに気づきかけている」とあるが、この時のコーチの心情として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア フライを捕るために身体まで張って指導したにも関わらず、子どもたちの力量が全く足りていないことによく気づき、驚きあきれている。

イ ふざけたがっている子どもたちをあまりに強く叱りつけてしまったために、観客である母親たちもあきれていることに気づき、後悔している。

ウ ふざけたがっている子どもたちに、ふざけるのに格好の機会を与えてしまい、もはや真面目に練習することができないのではないかと案じている。

エ 子どもたちの母親が観ている前で、コーチとしての確な指導をしなければならぬが、子どもたちがふざけてばかりいるので、激しく怒っている。

オ 技術がおぼつかない子どもたちに、コーチとして正しいを指導をしたつもりが、子どもたちが真面目に取り組んでくれないので悲しんでいる。

問六 傍線部⑥「私はシャッターのようにまぶたをゆっくりと降ろしては、また開く」とあるが、これは「私」のどのような心情を表しているか。これを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、iv について本文から六字で特定してそのまま抜き出し、v は最も適当なものを【選択肢】ア～エから選び、記号で答えよ。

子どもたちが全力で楽しみ、輝いている様子を見て、iv 六字 光景を前にしている思いがしている。「シャッターのように」という表現は、その光景を自分のv に留めておきたいという心情を表している。

【選択肢】 ア 現象 イ 記憶 ウ 解釈 エ 資料

問七 【本文】における少年たちの描かれ方として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア コーチの期待に応えるべく全力を尽くしているが、コーチにおびえているせいであまりいかず、悲壮感を漂わせている様子が描かれている。

イ コーチの指導を信頼していないために、何を言われても従わない反抗的な態度を示しており、自立していこうとしている姿が描かれている。

ウ コーチに従ってはいるが、技術が追いついていないので失敗することが多く、だんだんとコーチへの不信感を表していく様子が描かれている。

エ コーチの指示に最初のほうでは従っていたが、次第に集中力を欠きはじめ、野球以外のことに楽しみを見出しふざける様子が描かれている。

オ コーチの怒号に最初はとまどいを覚えていたが、だんだん慣れてうまくあしらう方法を覚えていく、コーチをからかう様子が描かれている。

問八 【本文】の表現の特徴を説明したものととして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 「無数の小さな靴底がその橙を蹴散らし、光が拡散する」など、幻想的な比喩表現を多用し、現実ではありえない光景を描き出すことによって、リアリティのある物語ではあるがファンタジーの世界であることを強調している。

イ 「かきん」とぼけた音を立ててコーチがフライを打ちあげ、少年の一人がそれを追う。」など、語り手の「私」の心情は一切記述されることがなく、擬音語を多く用いて描写することで主観を排した硬質の文体となっている。

ウ 「ボールは頭上に掲げたグローブの遥か先に、あるいはまったく見当違いの方向にしらじらと着地する。」など、子どもたちの技術の低さや滑稽さを描写することで、「私」が徐々に子どもたちに同情していく構成になっている。

エ 序盤から中盤までは、「コーチは吠え、少年たちは爆笑し、ギャラリーからはため息がもれる。」などと、登場人物の様子を客観的な立場で描写しつつ、終盤では少年たちと母親に対する「私」の心情を実感を込めて描いている。

オ 「少年たちは体をくねらせてにやつき、まるで反省の色がない。」など、子どもたちが全力でふざけている様子を写実的に描写しつつ、時折母親たちの会話を挿入することで最後まで傍観者の立場を崩さない構成になっている。

問九 次の会話は【本文】と【資料】を読んで、先生と生徒たちが話し合ったものである。これを踏まえ会話文中の空欄 vi・vii に入る言葉を、それぞれ【本文】や【資料】から指定字数に沿って特定し、そのまま抜き出して答えよ。

先生 …【本文】には、母親たちの会話が挿入されているね。この会話を聞いている「私」の心情の変化について考えてみよう。

生徒 A …【本文】の最初は、「となり合わせたベンチから気の抜けた女性の声が出た」とか、「リアリティのない会話に興ずる」とかの表現から、母親たちのくだらない会話をなんとなく聞いている「私」の姿が想像できるね。心情の変化を理解するために作者の森絵都さんが会話表現の特徴を語っている文章を見つけて読んでみたよ。それがこの【資料】だよ。

生徒 B …この【資料】をもとに、【本文】で「欽ちゃん走りみたい」と母親がつぶやいた時の「私」の心情について考えてみよう。「さつきから胸にもやつきながらも形にならずにいたものが一瞬で明確な像を結び」の部分は「横走り」を「欽ちゃん走りみたい」と表現したことの上手さに、筆者は深く納得しているね。

生徒 C …これは「日常の会話」の特徴のうち、「vi || 五字」に当たるんじゃないかな。「横走り」を「欽ちゃん走り」と言い換えた「vi || 五字」に、「私」も深く納得したんだね。

生徒 A …このように「母親」たちの会話を耳にしているうちに、「私」はどんどんその会話に引き込まれていったんだね。これが【本文】の最後の段落に出てくる、「vii || 二字」という言葉に表れているね。

【文章Ⅱ】

礼は人間から起るものだ。人間は生まれると欲をもつ。欲するところがあってもそれが得られないと、いらだち怒らざるを得なくなる。いらだち怒って限度を失えば争い、争えば乱となる。古代の王となった人はその乱を憎んだがために、礼義を制定し、一方では人の欲するところを育てながら、人の欲しがるものを与え、その欲望で物を与えても尽きないようにし、一方では物資が欲求のために欠乏しないようにし、欲と物と、両々相まつて長じ不足させないようにした。これが礼の起源なのである。

【史記四（八書）新釈漢文大系 明治書院 ※設問の都合上訓点を補い、旧字体を新字体に改めた箇所がある。】

【文章Ⅲ】

第六章「礼」——人とともに喜び、人とともに泣けるか

外国人旅行者は誰でも、日本人の礼儀正しさと品性のよいことに気づいている、品性のよさをそこないたくない、という心配をもとに礼が実践されるとすれば、それは貧弱な徳行である。だが礼とは、他人の気持ちに対する思いやりを目に見える形で表現することである。

それは物事の道理を当然のこととして尊重するということである。

したがってそれは社会的な地位を当然のこととして尊重するということを含んでいる。だが、それは金銭上の地位の差を示しているのではない。それは本来、生活上の利点に対する差を表している。

礼はその最高の姿として、ほとんど愛に近づく。*ひげん 私たちは敬虔な気持ちをもって、礼は「長い苦難に耐え、親切で人をむやみに羨まず、自慢せず、思いあがらない。自己自身の利を求めず、容易に人に動かされず、およそ悪事というものを企まない」ものである

といえる。

【新渡戸稲造 『奈良本辰也訳・解説「武士道」』三笠書房 ※問題作成の都合上一部改変】

【語注】*敬虔…敬い慎むさま

問一 【文章Ⅰ】中の空欄 i・ii に入る語句として最も適当なものをア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

i ア 芸 イ 心 ウ 礼 エ 智 ii ア 我 ともがら イ 輩 ウ 宴 エ 道

問二 二重傍線部 a「興」は本文中でどのような意味で用いられているか。熟語で示した場合最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 興趣 イ 興起 ウ 興奮 エ 興味

問三 二重傍線部 b「が」と同じ用法のものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 雁の列ねたるが、いと小さく見ゆる。 イ めでたく書きて候ふが、難少々候ふ。

ウ 雀の子を犬君が逃がしつる。 エ わが宿のすだれ動かし秋の風吹く。

問四 二重傍線部 c「人よろこばしめん」とあるが、「人」と「よろこばしめん」の間に補ったほうがよい助詞を一字で書け。

問五 二重傍線部 d「たぐひ」、e「ゆゑ」の読みを全て現代仮名遣い、ひらがなで書け。

問六 傍線部①「さらに遊びの興なかるべし」とあるが、その理由は何か。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 遊びの興とは人が負けて悔しがる様を見ることにあるので、自分が負けてしまつてはその機会を奪われてしまうから。
- イ 遊びの興とは自分が相手より勝っていることを喜ぶことにあるため、自分が勝つことが遊びにおいて最も重要だから。
- ウ 遊びの興とは相手と自分が競り合うなかにあるため、自分から負けようとすることは勝負の盛り上がりには欠けるから。
- エ 遊びの興とは相手を喜ばせようと陰ながら努力することにあるので、勝負そのものを楽しむことができなくなるから。

問七 傍線部②「争いを好む失なり」とはどのような意味か。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 争いを好むという人間が持つて生まれた宿命である。 イ 人に争いを好む性質を持たせた神の過失である。

ウ 争いを好むという人間の性質がもたらす弊害である。 エ 人は争う生き物だということを失念してしまう。

問八 【文章Ⅰ】で示される、「争ひ」によってもたらされるもの、「学問」によって可能になることとの組み合わせとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 争ひ…他者への優越感 学問…要職への就任 イ 争ひ…人からの怨み 学問…利益の放棄

ウ 争ひ…自尊心の維持 学問…人間としての成長 エ 争ひ…他者への劣等感 学問…善行の蓄積

問九 【文章Ⅰ】と同時代に成立した『方丈記』の著者を次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 松尾芭蕉 イ 小野小町 ウ 近松門左衛門 エ 柿本人麻呂 オ 鴨長明

問十 次の先生と生徒の会話は、【文章Ⅰ】を授業で学習した後、「礼」について考えた時間のものである。この会話を読んで、次の1～3の各問いに答えよ。

先生 今日「礼」について考えるために、資料として【文章Ⅱ】と【文章Ⅲ】を用意しました。【文章Ⅱ】は中国の前漢時代に書かれた作品の現代語訳、【文章Ⅲ】は明治時代に書かれた文章の現代語訳です。それぞれを参照してみましょう。

生徒A：「礼」とか「礼義」という言葉は日常でよく使うけれど、それがどのような意味をもっているかについて深く考えたことはありませんでした。

生徒B：【文章Ⅱ】では、「先王」が「乱」を嫌い、iiiとivの両方を不足させないようにしたことが、「礼」の起源だとしているよ。

生徒C：「【文章Ⅲ】では「礼とは他人の気持ちに対する思いやりを目に見える形で表現することである。」と述べています。これは【文章Ⅰ】では v という部分に当てはまると思っています。

生徒D：「【文章Ⅲ】の末尾に見える筆者の考えは、【文章Ⅰ】でいえば礼は vi ことによって獲得できるということだと思います。

生徒E：「礼」とは何かということについてこれまでの認識とは違った理解ができました。

1 空欄 iii・iv に当てはまる語句を、【文章Ⅱ】の現代語訳中からそれぞれ漢字二字で抜き出して答えよ。

2 v にあてはまるものとして最も適当なものを後のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 「人を先にする」
イ 「おのれが芸を勝りたるをよろこぶ」

ウ 「むつまじき中に戯るる」
エ 「その智を人に勝さんと思ふ」

3 空欄 vi に当てはまる語を【文章Ⅰ】の本文中から四字で特定し、そのまま抜き出して答えよ。